
アイロンより熱く、シャツより爽やかに

井口亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイロンより熱く、シャツより爽やかに

【Nコード】

N7740Y

【作者名】

井口亮

【あらすじ】

青春って何だろう？他愛ない日常に不満と、不安を抱くどこにでもいる高校生、遠藤真一は新任の英語教師に勧められるまま部活動をはじめることにする。だが、その部活は『危険な場所でアイロンをかけるスポーツ』、『エクストリームアイロン』を行う部活だった。友情、恋愛、青春……どれもがアイロンより熱く、シャツより爽やかに。 ※第12回電撃大賞第三次選考通過作品

プロローグ『という名の但し書き』（前書き）

読みやすいように台詞の前には改行してあります。

……プロローグを入れ忘れてたので追加しますた。

プロローグ『という名の但し書き』

まず、はじめに言っておかなければならない。

よく、勘違いされる方が多数居る。

これから僕こと遠藤真一、十七歳が体験するこのスポーツは決して架空のスポーツではない。

競技人口こそ少ないものの、サッカーや野球と同様に愛されているスポーツだ。

だけど、少なからず僕らがこのスポーツにかけた情熱に共感頂けるだろう。

一緒に感じてください。洗濯し終わった清潔なシャツのような爽やかで、熱したアイロンのような熱い、青春の日々を。

プロローグ『という名の但し書き』（後書き）

投稿を考えてる方の参考になれば幸いです。

この年の『狼と香辛料』は受賞後に読んで『うわー、面白えー』と唸っただけあって、数年後ヒットしましたねえ。

そういや扉の外の土橋先生は今何やってるんだろう。

あの人も面白かったんだけどぬう。

第一章 『アイロンと僕』

「真一、せっかくの土曜日だし今日帰りどっか寄っていきい！」

ホームルームが終わり帰ろうとしたところで声をかけられた。

「遠慮しとくよ、金井こそバスケ部の試合近いんだろう？練習に行けよ」

僕は同級生である金井みかの誘いをぞんざいに断ると、薄っぺらい鞆を手に取り席を立った。

僕こと遠藤真一と違い、金井みかは勉強もスポーツもできる絵に描いたようなクラスのアイドルみたいな奴である。

肩のラインで揃えた校則に引っかからない程度の茶髪のショートカット。活発な性格を象徴するような大きな目と、いまだき珍しいヘアバンドが特徴的と言えば特徴的か。

小さい頃からの腐れ縁であり、たまにこうやって声を掛けてくる。

しかし、みかは来月にあるバスケの地区予選にもレギュラーに出されており、今は僕のようなつまらない人間と関わっている暇は無いはずだ。

「たまにはいいんだって。真一最近元気ないじゃん？だから一緒に遊びに行こうっていつてんの」

形のいい眉を潜め、不機嫌な顔をあらわにしながらみかは言う。

「ん、ありがとう。でも今日は忙しいんだ」

それはウソだ。

今日の午後は何も予定はないし、何もする気は無い。

「何にもやる事なんか無いのに？」

みかもその程度の僕の予定はわかる。

しかし、僕はあえて取り合わない事にした。

僕は答えずに鞆を持って教室を出る。

正直、何をしてもやる気がおきない。

私立北星学園で一年過ごし、今では二年生になるが、僕はこの学園生活を含む全てのものに嫌気がさしていた。

校門を出て、通いなれた道を歩く。

まだ少し寒い春の風を頬に受ながら、学校の周りをランニングする野球部員とすれ違う。

その野球部員は僕も知っている奴で、去年の春から真面目にクラブで練習し、今年晴れてレギュラーになった奴だ。

僕に目くれる事もなく、息を弾ませて走り去っていく。

奴の頭の中はきっと、地区予選で一杯なんだろう。

僕はその後ろ姿を目を細めながら眺めると小さくため息をついた。僕は家につくと、居間で自分の茶飲み友達と電話している母親に、ただいまと一方的に伝えたと二階にある自室へ入った。

カーテンを締め切った暗い部屋の床に鞆を放り投げると、ベッドに倒れこむ。

僕はブレザーを脱ぎ、ジーンズとトレーナーを着ると、その上からパーカーを羽織った。

下でまだ、友達と電話で話している母親に出掛けてくる旨を告げるとそのまま外に出た。

コンビニでサンドイッチを買うと、家の近くの公園に赴く。

土曜日の公園は子連れの主婦が多く集まり、小さな子供が遊具で遊ぶ横でおしゃべりをしていた。

僕はそれを横目で見ながらベンチに腰掛ける。

先ほどコンビニで買ってきたサンドイッチを開きそれを齧る。

隣のベンチでは灰色のコートを着た三十歳くらいのサラリーマン風の男が自分と同じようにサンドイッチを膝の上に開きながら、携帯電話で仕事の話をしていた。

落ち着かない様子でサラリーマンは会社となにやら話し合っている。

僕も来年は受験勉強をし、大学に進み、そしてこの人みたく仕事をやるのだらう。

まあ、うまく合格した場合の話であるが。

僕はしばらくその人の様子を見ていた。その男の人は電話を終えた途端、大きいため息をつくサンドイッチを齧りながら立ち上がった。

それから、不機嫌そうな声で何かを呟きながら立ち去っていく。何か仕事でトラブルでもあったのだらう。大人になれば色々と抱えるものがあるのだらう。

その姿に遠い将来の自分を重ねながら、僕もため息をついた。どれくらいそこに居たのだろうか。

ふと、僕の携帯電話が鳴った。

僕は着信がみかである事を確認し、舌打ちすると一応出る事にした。

「もしもし」

「真一。今どこに居るの？」

「ああ、さくら公園に居るよ」

「あんた、机の中に宿題忘れてってるよ？今から持っていくから」
「バスケの練習しなくていいのか？」

「今日はいいんだって言うてるでしょうに！少しそこで待ってなさい」

怒気をはらんだ声で一方的にまくしたてると、みかは電話を切っ

た。

僕は顔をしかめると、小さくため息をついて携帯電話をポケットにしまった。

それから程なく、みかが公園に入ってきた。

学校帰りのままなのだろう、まだ制服のままだった。

みかの表情は誰が見ても怒っていた。

「真一、やっぱり暇なんじゃない」

「まあ、そうなんだろうな」

僕はみかの棘のある言葉を適当に流すと、そっぽを向く。

みかは鞆から宿題のプリントを出すと、僕に突き出してくる。

僕はそれを受け取ると、折りたたんでポケットにねじ込んだ。

「ありがとう」

「最近、真一、ぱっとしないね？」

みかはため息をつく。僕の隣に腰掛けた。

僕はサンドイッチを齧りながら、みかを眺める。みかは僕の膝の上にあるサンドイッチを取ると齧った。

「こら」

「これでいいでしょ？」

みかは鞆の中から缶コーヒーを出すと僕に押し付けた。微糖のそのコーヒーは買ったばかりなのだろう、まだ熱かった。

「できれば無糖がよかった」

「文句言える立場じゃないでしょう」

みかはもう一本缶コーヒーを取り出し、それを開ける。
みかのコーヒーはしっかりと無糖ブラックである。
僕はコーヒーのプルタブを押し込むと、口をつける。

「そうそう、真一？ バスケ部の二ノ宮遥って知ってる？」

「一年生のだろう？ お前の後ろにしょっちゅう居るじゃないか」

「今度、真一と遊びたいんだってさ？」

「なんで？」

「真一って疎いのねえ」

「疎いんじゃないくて面白くないだろう。僕と居たって」

僕の口調は少し怒ったものになっていた。

何故だろう。凄くイライラする。

僕はぐっとコーヒーを喉の奥に流すと、遠くのゴミ箱に空になった缶を放り込む。

からんと乾いた音をたててくるとゴミ箱の中で缶が回る。

みかはそんな僕の様子に気づく事もなくけらけらと笑っている。

「いいんじゃない？ 本人さえ楽しければ。そんなもんでしょ？」

「いいねえ、羨ましいよ。楽しいと思えるものがあるのは」

「私は真一の方が羨ましいよ。一日中こうやってのほほんとして何も悩みもなさそうにぼけーっと暇にしていれるなんて」

「そうなの？」

「だって、今、みんな中間試験やクラブの試合だとかで忙しいじゃん。真一くらいだよやってだらだらしてるの」

僕は言われようの無い苛立ちを感じつつも、それを胸の奥にしま
いこんだ。

「そうかあ……」

僕は吐き出すようにそう呟いた。

しばらく、僕とみかはベンチに座ったまま、黙って公園で遊ぶ子供達を見ていた。

サンドイッチも食べつくし、コーヒーも無くなる。

そういえば昔、みかとここで遊んだ事もあったつけ。

かくれんぼで、鬼だったみかを置いてそのままみんなで帰った事もあるし、今は撤去された回転遊具で遊んでいて、みかに足を掛けられて転ばされ、病院に行った事もある。

「そういえば昔、ここでよく遊んだよね。かくれんぼで鬼のとき真一や博之達、私置いて帰ったよね？」

「次の日、地球儀で遊んでた僕の足かけてちゃんとやり返されたじゃないか。病院で四針も縫ったんだぞ」

「おかげで地球儀なくなったんだつけ」

みかはくすくすと笑う。

僕はため息をつくともかに聞いてみた。

「みか、自分の将来って考えたことある？」

「うーん、まあ、大学行ってそれからまあ、なんとかなるだろうくらいには考えた事はあるけど……」

みかはそう言って一度言葉を切った。

「でも、今はそんな事考えてる暇ないかな？だって、バスケットか恋とかで忙しいもん」

「誰か好きな人でも居るのか？」

「居ないよ。これから誰かを好きになるの」

「はあ？」

みかの返答に僕は少々面食らう。

「だって、高校二年のこの時期は一生の間で一度だって戻ってこないんだよ。だったらやれるだけの事やりたいじゃん？ 真一はそういうのって何かないの？」

何か言葉が胸の奥にのしかかってくるような感じがした。

「無いよ。あればこんな事してねえだろうに」

「まあ、そうでしょうねえ」

答えて僕はまた、イライラしてきた。

イライラの原因は多分自分でもわかってる。

だけど、僕は認めたくないだけだ。

「真一は部活に入らないの？ バスケ部とか入れば遙が喜ぶんだけど」

「今更入ったって練習してる奴に迷惑だろう？ レギュラーになれる訳でもないし。多分ずっと帰宅部してるんじゃないかな」

「真一だったらそんなものか」

みかはくすくすと笑って立ち上がった。

「行くのか？」

「うん、何か話したらバスケの練習したくなった」

「試合、近いしな。頑張れ」

「真一も頑張ってね」

「……何も頑張る物がないけどな」

「遥と付き合えば？ 恋愛も青春のうちだぞ」

「考えるだけ考えておく」

僕は適当にそう答えると、手を振って立ち去っていくみかの背中を見送った。

僕はその後、公園を後にすると商店街のゲームセンターに足を伸ばした。

帰宅途中の学校の後輩だろう、ゲームの筐体に群がり、がやがやとやっている。

僕も携帯で友人と呼べる友人に連絡してみたが、あいにくどういっても出ないか部活で忙しいとの返答だった。

いつもは一人くらいは誘いに乗るのだが、今日は珍しく皆無だった。

僕はため息をつくと一人でゲームをして時間を潰すと、家に帰る事にした。

家に帰ろうとする頃にはあたりも暗くなっていて、家に着いたら既に夕食の準備ができていた。

そのまま食卓につく。

珍しく夕食前に親父が仕事から帰ってきており、妹の麻奈を含め、家族四人で食卓を囲む事になった。

「最近、学校どうなの？」

「何も無いよ」

以前にもした事のある受け答えをして僕はいつもと大して変わらない夕食を胃に収める。

「麻奈はどうなの？」

「部活で妙子ちゃんが足くじいて今日病院に運ばれたよ」

「あら……」

下らない会話を耳の端に留め、僕は食事を終えようとした。
その時、親父が唐突に問いかけてきた。

「真一は今何かやりたい事はないのか？」

「なんでそんな事聞くんだ？」

「お前部活も何もしてないだろう。かといって友達とつるむ訳でもないし。高校二年だってのに色っぽい話すらないだろう？なら別に何かやりたい事があるんじゃないのかって思ったただけだ」

「別にそんなの無いよ」

僕はそう答えるのが少し、腹立たしかった。

僕はさっさと自分の部屋に戻るとテレビをつけてゲーム機の電源をつけた。

しばらくはそれで時間を潰し、飽きるとベッドに横になった。

わかっている。

そう、わかっているんだ。

みかも親父の言うことも。

僕のこの時間は昼間見た子供達の時間と一緒にであり、過ぎ去れば戻る事のできない時間で、いずれはあのサラリーマンのような世の中の煩雑さの中に入らなきゃならない。

その前に、時間のある今のうちにやりたい事や楽しい事をできるだけしろと言いたいのだろう。

それはわかっている。

だけど、何がやりたいのかわからない。

今更、みかの言うとおりバスケット部に入部したってずっと玉磨きで終わるだろうし、好きでもないバスケットに時間を費やすのもまたもつたない。

二ノ宮遥は確かに可愛い部類に入るのだろうが僕は彼女の事を知らないし、また好きでもない。

また、向こうだって僕を好きかどうか分からないし、浮かれて

その気になったら馬鹿をみるのは中学の時に味わっている。

恋愛に対して臆病になっているのもあるが、今は恋愛をしたいという気にはなれなかった。

そう、僕は決定的に何かしたいという衝動に欠けていた。

「くそったれ」

だけど、世の中にどれ程、この時期に思うような何か打ち込めるものを見つけて青春らしい青春を謳歌できる奴がいるのだろう。

多分、僕のようにだらだらと過ごしてしまう奴の方がきっと多いはずだ。

きっと、あの時、もっと遊んでおけばよかったと将来後悔しながら、大半の人は大人の事情という奴にもみくちやにされるのだろう。僕は寝返りを打つと風呂に入らず寝ようと思った。

まどろんでゆく意識の中で、所詮人生なんてこんなものだと思いつ込み、納得しようとした。

漫画や小説みたいな青春なんて、人の作ったありもしない青春像で、こうなればいいなという理想の形なんだ。

それはあくまで理想であり実際に叶うものでは無い。

だから、僕はありふれた高校生活を送る標準的な高校生のままで終わるのだろうと、半ば諦めていた。

だけど、どこかでそんな青春に憧れて、そうありたいと思う自分も居る。

だから、こんなに腹が立つんだろうな。

僕はここで考えるのをやめた。

まどろみに落ちていく意識に身を任せ、その時、今日という何も生み出す事の無い一日が終わっていった。

「担任の柴田先生が家庭の事情で急遽辞める事になりました。今度からこのクラスを受け持つ事になった嶋本一彦です。専門は英語

です。よろしく願いします」

週を明けて登校したところ、担任の先生が変わっていた。

まあ、担任の柴田は両親の借金だとか何かと実家で色々あるという話を聞いていたのでややもすればこうなるとは感じてはいたが、まさか本当にこうなるとは思っていなかった。

新しく取って変わった担任の先生は教壇で教鞭を取るより、ベンチプレスでバーベルを持ち上げている方が絵になるようながっしりとした体格の男だった

年の頃なら二十台後半だろう、耳に残る大きな声で大雑把に出欠を取る。

「そしたら、悪いけど休み時間に出席番号一番から順に面接してくからな。俺まだみんなの事全然わからないからな」

嶋本先生はホームルームの締めでそう告げると、礼を済ませる。隣の席のみかが囁く。

「……何か熱そうな先生だね」

「かもしれないな」

僕はどうでもよさげにそう答えた。

だが、僕はこの男との出会いがこれからの学校生活を変える出会いだとはまだ、気がついてはいなかった。



僕の面接の順番が回ってきたのは昼休みの一番最初だった。

生徒指導室という名前だけの空き部屋に入り、机を挟まず嶋本先生と向き合って椅子に座る。

「ええと、遠藤真一だな？ 何だ部活動してないじゃないか。さみしい野郎だな」

「……先生失礼ですよ」

「お前こそ青春に対して失礼な奴じゃないか。どのみち、お前、彼女とかもいなさそうだしな」

嶋本先生はげらげらと笑いながら、僕の肩を叩いた。初対面で失礼極まり無い事を言われているが嫌いになれない爽やかさが嶋本先生にはあった。

「で、お前、これからどうする気よ」

「これからって？」

「高校生活だよ。何かやるのか？」

「高校三年になったら受験勉強して大学行こうと思います」

僕は正直にそう答えた。

嶋本先生は額を押さえながら難しい顔を見ると、一人頷いた。

「寂しい奴だなあ……」

「自覚はしてます」

嶋本先生はひとしきり僕の顔を眺めると、何かを納得したように頷く。

「じゃあ高校二年やってるうちは暇なんだな？」

僕は頷くしかなかった。

嶋本先生は生徒指導簿に何かを書き込むと、にやりと笑った。

「よし、お前、俺が今度顧問する部活に入れ」

「は？」

「丁度部員になれそうな奴探していたんだ。いいだろう？暇なんだから」

「確かに暇ですが、やりたくない事までやるのは嫌ですよ」

僕は顔をしかめる。

嶋本先生は笑顔のまま頷いた。

「確かにそうだな。だが、何もやる前から面白くないと決めつけるのもまた良くないだろう。とりあえず一度やってみてから決めてみる」

「はあ」

僕は曖昧な生返事を返す。

嶋本先生はにやりと笑うと、僕の肩を叩き、告げる。

「お前、明日も暇だろう？だったら放課後俺と付き合え。さっそく、部活動だ」

何か一方的に流されているような気がしないでもないが、僕は頷いた。

「でよ？これだけは自分で準備してもらいたいものがあるんだ」

「はあ」

ジャージでも用意すればいいのだろうか？僕は明日、この新しい先生に何と言って入部を断ろうか考えていた。

嶋本先生は僕の予想を裏切ったものを用意しろと言った。

「アイロンとアイロン台は自分で用意してくれ」



ホームルームが終わり、帰宅準備をしている時に昼の出来事をみかに話したところ、みかが怪訝な顔をした。

「はあ？アイロンとアイロン台？何の部活なの？」

「……聞くの忘れてた」

僕は頭を掻いて難しい顔をする。

「あの体で真一と二人して、シャツにアイロンをかけてる姿ってあんまり想像できないんだけど」

「僕も想像したくないな」

「なら、なんで断らなかったの？」

「断る理由が無かったから……明日には断るよ」

僕が鞆に教科書を詰めながらそう答えるオと、教室の入り口に知った女生徒が居た。

みかの後輩の二ノ宮遙で、遙は僕と目が合うと軽く頭を下げる。

僕も彼女に軽く頭を下げ返すと、目の前で唸るみかに顎で合図する。

「ふーん……あ、遙が来た。真一、バスケの練習行くな。もし暇だったら練習見に来る？遙も喜ぶよ？」

「いや遠慮しとく。今日は孝とゲーセン寄って帰る」

「そ、じゃあまたね」

僕は軽快に走りさるみかの後ろ姿を見送ると鞆を取り学校を後に

した。



ゲーセンで十分に時間を潰した後、家に帰った。

母親が洗濯物を干している横を通りすぎながら、僕はアイロン台を探す。

「母さん、アイロンとアイロン台ある？」

「自分でシャツの皺でも伸ばすの？」

「いや、明日部活動で使うんだと」

「あんた部活やるの？」

「体験だけどね、まあ、行くなって事になってるから一応持っていないと」

「何、運動部員の洗ったシャツにアイロンかけるのかい？」

「わからないよ。それだったら何か嫌だから辞めてくる」

何か母親が言った事が本当になりそうで嫌な気がした。

他の運動部員の洗い終わったシャツをアイロンがけるなんて何か屈辱的だ。別に関係ない奴のシャツなんざ知ったこっちゃいない。

僕は押入れのすみにあったアイロンとアイロン台を見つけると引っ張り出す。

「このアイロンコードついてないよ？」

「ああ、それ今流行りの充電式コードレスアイロン。充電されてるからスイッチ入れれば使えるわよ」

「いいや。借りる」

「ちゃんと返しなさいよ」

僕は少し焦げて茶けているアイロン台とアイロンを持って自室に

「着けば分かるって」

嶋本先生に連れられ、嶋本先生の車に乗る。

「これから、鳥山八景にいくぞ」

鳥山八景は学校から三十分くらい車で行ったところにある観光客用に設けられた山道だ。

もともとこの地区は扇状地になっていて、山から川が流れている。川の上流は谷になったり、切り立った崖になっていたり、八つの絶景があることからそう呼ばれているところだ。

だが、実際は極めて認知度の低いローカルな観光名所であり、地元でもあまり近づくことがない場所である。

嶋本先生の運転する緑色のジープのチェロキーに揺られながら、二ノ宮がみかに囁く。

「遠藤先輩これから何するんですか？」

「さあ？でもアイロン持ってきて昨日言われたみたいだよ？」

「アイロン？何に使うんですか？」

「さあ」

それを今一番知りたいのは僕だ。

しばらくしてジープは鳥山八景の駐車場につく、僕らはジープを降りると各々の荷物を持つと先生の後についていった。

「さて、これから山登るからな」

先生はさらりとそう言って、巨大なザックを背負ったまま山道を登っていく。

「お、ギョウジャニンニクだ……採っていこう。多分まだ沢山あるんだろうな」

嶋本先生は足元に生えている山菜をむしり、ザックにねじ込む。

「先生、自然観察クラブか何かですか？」

僕が聞いてみると先生が眉の根を眉間に寄せて人を馬鹿にしたような顔をする。

「お前、アイロンとアイロン台持って自然観察するツモリか？もうちょっと考えろ」

なら、せめてアイロン台とアイロンを何に使うのか教えて欲しかったが先生はすたすたと山道を登っていく。

僕の後を二ノ宮とみかがゆっくりと上ってくる。

しばらく、山道を登ると先生は「危険入るな！この先崖あり」と書かれた古い看板が立てられ黄色いロープの張られた小道に逸れて、そのロープを越えて中に入っていく。

僕とみかと、二ノ宮はそれぞれお互いの顔を見合わせる。

「おーい、何してる。早く来ーい」

どこか楽しげな声で嶋本先生が僕らを呼ぶ。

僕らは何か釈然としない物を感じながら先生の後を追った。

まだ、春先とはいえ少し寒い。

歩く先で枯れた枝を踏み、靴の下ではきぱきと音がする。

スネまで茂った草を掻き分けながら、先生の後を追う。

「枝がスカートに引っかかる……」

「……先輩、背中に虫ついてますよ」

みかや二ノ宮は虫を払ったり、スカートの裾を気にしながら嫌そうな顔をする。

「みか、二ノ宮と一緒に車で待ってたらいいんじゃないか？制服じゃ辛いだろ」

「でも、何するか気になるからついてく。遙ももちろん行くよね？」

みかに詰め寄られ二ノ宮は半ば強引に頷かされた。

「とりあえず俺、先に先生のところに行ってるから後からゆっくり追いつきな？」

僕は二人を気遣いながら、もはや森となった山道を進み、先生の後を追う。

しばらくして、道は急に途切れていた。

看板にあったとおり、崖になっていた。

崖の高さは五十メートルだろうか、下には川が流れており、その川を挟んで先程車で走った道路が走っていた。

道路の脇に立っていた看板からすれば今僕らがいる場所は鳥山八景の一つ、鳥山絶壁の上に居る事になる。

先生はザックの中からロープやらヘルメットやらを取り出しながら、何やら準備をしている。

その様子を一部始終眺めながら僕は嫌な予感がした。

「先生、これから崖を降りるツモリですか？」

「途中までな」

先生はそう言って僕にナイロン製のベルトを投げて渡した。僕も映画や、ニュースで見たことがある。これはハーネスという奴だ。

「ラペリング用のハーネスだ。それ、とりあえず着けてくれ。あ、制服が汚れるっていうんだったら、そこに作業服あるからそれに着替えろ。後、ロープで手を焼かないようにグローブもつけろよ」

「……ロッククライミング部ですか？」

「残念だ。これからするのはロッククライミングみたいなもんだが、それは目的を達するための一つの過程でしかない」

僕は嶋本先生の隣で、用意された作業服に着替えながら、僕は顔を難しくする。

いい加減、そろそろ何をするかはっきりさせた方がいい。

ロッククライミングは昔から一度やってみたいとは思ってたからやってみてもいいが、それでもないとなると何をするのか聞いたなさねばならない。

「先生、そろそろ教えてくださいよ！こんな崖まで来てロッククライミングまでして何をするんですか」

嶋本先生は目をぱちくりとさせながらまるで何でわからないのか不思議な顔をする。

「お前、自分の荷物で何もって来てるんだ？」

「アイロンとアイロン台です……」

僕はアイロンとアイロン台をバックから取り出すと嶋本先生に見せた。

「おお、西芝の新型、今流行りのコードレスアイロンじゃないか、
一番いいの持ってきてるじゃないか」

「これで何するんですか、断崖絶壁で崖に張り付きながらアイロ
ンでもかけるっていうんですか？」

嶋本先生は僕の肩を叩くと

「わかってるじゃねえか。なら聞くんじゃねえよ」

と笑って答えた。

断崖絶壁に張り付きながらアイロンをかける？

「冗談ですよ？」

僕が聞き返すが先生は至極真面目な顔で答える。

「冗談なものか。極端なアウトドア活動のスリルを健康なプレス
加工されたシャツの満足と結合する最新のデンジャラススポーツ：
：これが、今からお前のやるスポーツ『エクストリームアイロン』
だ。俺とお前はこれから誰も体験したことのないようなスリルのあ
る生活を体験するぜ？」

嶋本先生はそう言って親指を立てて不敵に笑う。

今、分かった事がある。

こいつは多分、馬鹿だ。

先生という職業だが、間違いなく馬鹿だ。

確かに誰も体験しはしないだろう。

誰もそこまでしてアイロンなどかけようとしなない。

嶋本先生はハーネスをつけると、ザツクの中からコイル状にまか

れたロープを二巻き取り出した。

それを慣れた手つきで手近な木の幹に巻いて固定する。

嶋本先生はロープの片方を崖の下に向かって投げる。ロープはコイルを解きながら緩やかな弧を描いて崖下へと落ちていく。

「先生、アイロンかけるにはこの崖めちやくちや高いですよ」

「エクストリームアイロンじゃこんなところ常識だって。まあ、一番最初のうちは人の多い通りだとか、家の庭で逆さづりになってアイロンが妥当なんだけど、それじゃお前も楽しくないだろう？」

楽しくなくてもいい。とりあえず身の安全を保障してもらいたい。僕が作業着に着替え、ハーネスをつけて木偶人形のように突っ立っていると嶋本先生はザツクの中にあつたヘルメットを僕の頭に被せる。

「まあ、落ちたらこんなの役に立たないが、ヘルメットは上からの小石とか落下物に対しては有効だからな。準備ができたらハーネスの金具にロープを通せ……って言ってもやり方わかんねえよな。いい、俺がやる」

嶋本先生は僕の腕を引っ張り、木の幹に固定されたロープの場所まで来ると腰のハーネスの金具にロープを通した。

「うっし、準備はこれでOKだ。アイロン台とアイロン持て。シヤツは……さっきまで着てた学校のシヤツあるだろ。それも一緒に持って降りるぞ」

嶋本先生は僕の準備が終わると、自分のハーネスにロープを通しながらそう言った。

僕は一応、先生に言われるままアイロンとアイロン台、さっきま

で着ていたシャツを手を持つ。

先生は準備ができると、ザックの中からカメラを取り出し、首にぶら下げる。

「よっし、じゃあ、行くぞ」

向こうも準備が整ったのだろう。

もう顔が断崖絶壁をロープでラペリングして降りるツモリでいる。僕はもう一度、嶋本先生が降りるツモリでいる絶壁を眺めた。

地質についてはよくわからないが、花崗岩とかそんな名前がついてそうな灰色の岩肌がむき出しになった崖で、高層ビルの屋上から地面を見下ろすくらい高さ、やはり最初の目測どおり、五十メートルくらいはあるのだろう。

崖の下を覗きこむと程よく恐怖心を煽る爽やかな風が吹き上げてくる。

足元にあった小石を蹴って崖に蹴り落としてみるが、下に落ちるまでにかかなりの時間がかかっている。石が地面を叩く音は無論、聞こえない。

僕は軽い眩暈を覚えて先生に言った。

「先生。危ないです」

酷く、端的な言葉で現状を表せたと思う。僕が国語の先生なら間違いない満点をつける回答だ。

だが、彼は英語の先生だった。

「大丈夫だって。降り方とか俺が教えてやつから」

「そういう問題じゃなくて、落ちたら死にますよ」

「だろうな……なんだ、遠藤ビビッてるのか？」

正直、ビビッている。

もし、この場所に僕と嶋本先生しかないのであれば僕はここで素直に頷いて、辞退したかもしれない。

そうすれば、僕はいままで通りの安穩とした生活をだらだらと送る事ができたかもしれないなかった。

だけど、運命というのは時に残酷なもので、その登場がもう少し、遅ければ別の結果を招いていたのかもしれないなかった。

丁度、その時にみかと二ノ宮が僕に追いついてしまったのだ。男の尊厳という物がある以上、二人の前で醜態をさらす訳にはいかない。

二人は息を切らしながら、作業服にヘルメット、腰にはハーネスをつけてアイロンとアイロン台、それにシャツを抱える僕を見ている。

当然、その姿は僕から見ても滑稽なのだから二人にとっても滑稽なものに映るだろう。

二ノ宮が口元を押さえて笑いをこらえている横で、みかが目をしばたかせて僕に尋ねる。

「あんた何するの？」

「これから崖の途中でアイロンがけするらしい」

「崖の途中でアイロン崖？体張った新手のギャグ？」

「お前からも先生に言ってやってくれよ。こんなの無意味だって」

僕はみかを巻き込んでなんとかこの場をしのごうと思った。

「確かにねえ……はたから見たビジュアル的には馬鹿で面白そうだけど……ちょっと危険すぎる気がするわ」

「落ちたら死んじやいますよ」

みかと二ノ宮が崖を見下ろしながら恐る恐る口に出す。

先生は二人の肩を叩くと

「刺激的だろ？」

と笑い飛ばした。

確かに刺激的だが、こんな刺激は要りません。

嶋本先生はみかと二ノ宮を面白そうに眺める。

どこか自信のある、そして、いたずらめいた笑みだった。

「金井と二ノ宮はバスケ部だよな？」

「はい」

「ところで、バスケットボールってのは高いところにあるゴールにボールをシュートして相手チームより多く点数を取るのを競うゲームだよな？」

「ですね」

「それに何か意味なんてあるのか？」

「はあ」

嶋本先生の質問にみかが曖昧に答える。

だが、明らかに納得のいかない顔をしている。そりゃそうだろう、一生懸命やってきているバスケに何か意味なんてあるのかなんて言われれば僕がみかの立場でも納得がいかない。

みかは少し慚然とした態度で答えた。

「確かにボールをゴールに入れるだけだったら何の意味も無いかもしれないですけどそんな事言ったらスポーツなんてみんな意味が無いじゃないですか？スポーツってある意味ゲームみたいなものですから楽しめる事に意味があると思います」

嶋本先生がにやりと笑うのが見えた。

「そうだ、スポーツは楽しむ事に意義がある。このアイロンがけも一緒だ。アイロンをかけてシャツの皺を伸ばすのが目的じゃない。要はいま、金井が言ったとおり、皺を伸ばすまでの過程を楽しむのが目的だ」

何か言ってる事がわかるようでわからない。

わかってはいけないような気もする。

みかはまだ難しい顔をしているし、二ノ宮も半分納得したような納得しないようなわからない顔をしている。

「ま、いいや。とりあえず行くぞ。いつまでもこんなところでビビっていても仕方ないだろう」

ビビってという言葉に反応して僕はむっとした。

二ノ宮やみかが居る前では僕は男としての尊厳を保たねばならぬ。いい。

命の危険と男の尊厳であれば間違いなく命の方をとるべきなのだろうが、女子二名を前にしてそれができる程僕は人間として成熟されてなかった。

「真一、危ないよ。やめな？」

「先輩、やめた方が絶対いいです！」

僕は俯き、二人に目を合わせる事なく。

「いや、やる」

と答えた。

本当はやりたくはないのだが、そう言わざるを得ない。

だってそうだろう。やっぱり崖を降りるのが怖いからやめさせてくださいなんてみっともない事、言えるわけがない。

僕は先生に簡単にロープの持ち方や降りるときの足運びを教えてもらうと、背中にアイロン台を背負って崖を降りる事にした。

まるで地面が九十度傾いたかのような絶壁をゆっくりと交互に足を変えながら降りる。

「遠藤、もうちょっと体を起こせ！ロープを抱きかかえるように降りろ！でないと疲れるぞ」

先生が上から叫ぶ。

まだ先生は降らないみたいだ。

僕は先生の言うとおりに体を起こして、垂直に立っている地面に対し、体を九十度曲げて、まるで腰の悪い老人みたいな格好でゆっくりと降りた。

「いいぞ！初めてにしては上出来じゃないか」

僕はそれに答える余裕がなかった。

どのくらいの時間がたったのだろう。

多分、まだ、五分も経っていないのだろう。

だが、僕にとっては一時間以上たっている気がした。

その時には十五メートルくらいは降りていた。

ロープを握る手がじつとりと汗ばむ。

背筋も嫌な汗が伝わり、僕は心細くなってロープを抱き寄せる。

吹き上げる風はどんどん強くなるし、下をみると、吸い込まれそうなくらいに地面は遠い。

眼下を流れる川は白い水しぶきをあげ、激しい勢いで流れている。

僕が両手を僅かに開けば、僕は全ての物が支配されている自由落下の法則に基づいてそこに落ちる事になるのだろう。

落ちたら時は多分、もの凄く痛いのだろう。

前にバイクの交通事故現場を見た事があるが、そのときはバイクの運転手の太ももの骨が皮ズボンから肉を裂いて剥き出しになっていた。

ここから落ちればそんなものでは済まされないのだろう。

僕はそう思うと、そこから動けなくなった。

怖くなったのだ。

しばらくそこで蓑虫のようにロープにしがみつき、風に揺られていた。

「遠藤ー！どうしたー！」

上で先生が叫ぶ。

「真一ー！」

みかの声だ。

見上げると、三人が心配そうに僕を見つめていた。

さっきまで、僕の心を奮い立たせていた男の尊厳とやはらは完全に折れ、今は恥でも何でもいい、とにかく助かりたい気持ちで一杯だった。

「センサーー！！」

自分でもみっともないと思う。

でも、それでも僕は助かりたかった。

「やっぱり怖いです！助けてください！」

みかや二ノ宮に後でなんと思われようが僕はその時、自分の命の

方が大切だった。

二ノ宮やみかは、そんな僕の情けない姿を見てどう思うだろうか。僕は叫んだ後に恥ずかしく途端に恥ずかしくなった。

「待ってろ！今行くから！」

上から嶋本先生がまるでテレビでみるレスキュー隊員のように軽快に崖を降りてくる。

それに比べて僕はなんてみっともないのだろう。

先生は僕の横まで降りると、片手で僕の肩を揺さぶった。

「大丈夫か？遠藤」

心配そうに顔を覗き込んでくるが、僕は恥ずかしくて顔をあげられなかった。

「怖いのか？」

僕は黙って頷いた。多分、今日の前に鏡があれば僕の顔は真っ青で今にも泣き出してしまいそうな顔だろう。

僕は心底後悔した。

先生が何をするのかわかんなくて、のこのことアイロンなんか持つてついてきたが、こんな事になるとは思わなかった。

僕は所詮普通の人間であり、決してドラマや小説みたいな青春は送れない。

何か特別な事なんて何も無い青春を送ってだらだと大人になればよく、それがどれだけ素晴らしいものか、こうなるまでわからなかった。

これだったら、今日も授業が終わって家に帰ってゲームでもしていた方がまだ、マシだった。

僕は目の端に涙を溜めながら、ずっと俯いていた。
そうしたら、隣で、先生が急に叫び出した。

「ウオオオオオオオオオオオオオ！」

僕ははっとして、隣に居る先生を見つめる。

「先生？」

先生は僕の顔を覗き込むと、爽やかに笑う。

「なんか、こう、生きてる感じがするな？」

こんな時に何を言ってるのかわからなかった。嶋本先生は楽しそうに続ける。

「俺も最初は怖かった。けど、そのときは叫んだ。すると怖くなくなった。遠藤、お前も叫んでみる」

僕がきょんとしていると、先生は僕にむけてもう一度叫んだ。

「オオオオオオオオオオオオオオオ！」

僕は目を細めながら、それを聞いていた。

先生が叫び終わる。

僕は叫び返した。

「アアアアアアアアアアアアアア！」

上で二ノ宮とみかが、まるで僕らが気が触れてしまったのではな

いかと、心配そうな顔をして、僕らを見つめていた。

「オオオオオオオオオオオオオオ！」

「アアアアアアアアアアアア！」

僕と先生は交互に何回か叫びを交わした。

「っしゅあ、その気合だ！」

不思議と先ほどまであった怖さは消えていた。

「遠藤、イチ、ニ、イチ、ニで降りるぞ！」

「はい！」

自分でも驚くぐらいの大きな声で先生に答えた。

「エクストリム！アイロオン！イチ、ニ！イチ、ニ！」

「イチ、ニ！イチ、ニ！」

先生がかかる号令にあわせて、僕は足を交互に降ろす。

先ほどまでとは違い、自分の中に見えないエネルギーが流れ込んでくるような気がした。

僕と先生はそのまま、ゆっくりと交互に足を下ろしながら崖の半ばまで降りる。

さっきまでうるさかった風の音が今では何も聞こえない。

崖から遠くに見える僕が住んでいる町がなんだかとても小さく見えるし、そんなのにも目を向けるだけの余裕もあった。

崖の半ばまで来ると、僕らはそれ以上降りるのをやめた。

「エンドオー！」

「はい！」

「アイロン台、準備！」

「アイロン台！準備よし！」

もう、何か吹っ切れた。

僕はやけくそになりながら叫ぶ。

右手で尻にロープを押し付け付けブレーキをかけると、左手で背中に背負ったアイロン台を膝の上に乗せる。

「シャツ！アイロン用意！」

「シャツ！アイロン準備よし！」

ハーネスに引っ掛けていたアイロンとシャツをアイロン台の上に力強く乗つける。

「スイッチオン！」

先生が叫ぶ。

「スイッチオン！」

僕の指がアイロンのスイッチを捻る。

アイロンの鉄が徐々に熱を帯びてくる。

僅かにこぼれたスチームがアイロンの鉄の上で弾け、蒸気となる。鉄が、熱くなった。

「エクストリム！アイロン！」

「アイロン！」

僕は熱くなったアイロンをシャツに押し付けた。

膝に力を居れ、アイロン台一杯に広がった薄く黄色いシャツにア

イロンを当てる。

僕がアイロンを押す度に、シャツの皺が一つ、また一つと消えていく。

僕は吹き上げる風を受けながら奇妙な感覚にとらわれていた。

僕がもし、右手のロープを放せば落ちて死ぬのだろう。

死と隣り合わせの状況で僕は今何をしている？

両親に遺言を書くわけでもない、恋人に別れを言っている訳でもない。

シャツにアイロンをかけて皺を取っているのだ。

僕は急におかしくなった。

だって、考えてみる。落ちたら死ぬかもしれない崖に張り付いてアイロンがけをしているんだぞ。

多分、日本中のどこを探しても今、この時点でこんな酔狂をしているのは僕しかないんだ！

体の腹の奥底から、今まで感じた事の無いような熱い感じが溢れてくるのがわかった。

多分、これが生きている事を感じているって事なんだろう。

僕がアイロンをかける横で先生がカメラのファインダーを覗いている。

カメラのレンズは額に汗を浮かべ、必死にアイロンをかけている僕に向けられ、小気味のいい音を立ててシャッターが切られる。

僕は腹の奥から湧き上がってくる衝動を抑えられず、気がつけば叫んでいた。

「オオオオオオオオオオオオオオオオ！」

僕の叫びが世界を包んだ。

目の前が真っ白になっていくような錯覚を覚えながら僕は叫んだ。

第一章 『アイロンと僕』（後書き）

昔の自分が書いたものを見てると、苦笑しながらも「こんなのだうやったら書けるんだ？」と不思議になることも、しばしば。

第二章 『アイロンと風』

「ええ！辞めるの！もったいない」

「当たり前だろう。あんな部活、命がいくつあっても足りやしない。それに、あんな場所でアイロンかけても意味ないし」

あれから三日が過ぎ、登校し嶋本先生が作ろうとしていた部活を辞める旨をみかに伝えたところ、大仰に驚かれた。

「なんで？結構楽しそうだったじゃん」

「実際やってみてからそう言ってくれ」

みかは何か不思議なものでも見るように僕を見つめていた。

「真一に絶対合ってるよあのスポーツ」

アイロンがけがあっているというのも心底馬鹿にされているようで腹が立つ。

「冗談じゃねえよ。あんなんで死んでみろ。葬式でみんなに別の意味で泣かれるよ」

「あー、それはあるかも、なんであんなアイロンがけで命かけたんだろう。馬鹿馬鹿しくて泣きたくなってくるって。うん、約束する。私が一番泣いてあげるよ。笑いながら」

みかは面白そうに笑う。

「でも、今までみたくだらだらしてるよっかはマシなんじゃない？」

「それでも嫌だ」

僕は不機嫌な顔を隠すことなく、そう突っぱねた。

今日は授業も終わったことだから、これから家に帰ってダラダラする事に決めた。

あんな体験をした後でわかる事だが、安穩とした日常に甘んじるのもまたひとつの人生の形である。

僕は鞆を持って学校を後にした。

「そんな事言って、絶対あんたはアイロンしだすわよ」

僕は背中で見かの言葉を受け流しながら、学校を後にした。

僕は家につくとそのまま自分の部屋に引き籠もり、ゲーム機のスイッチをつける。

同級生に借りた、最近出たばかりのロールプレイングゲームで噂の超大作だ。

これで少なくとも三時間は潰せる。

だが、どうしてだろうか三十分もしないうちに僕は飽きてしまった。

なんだろう、やっぱり満足しない。

前みたいなの、何か胸の奥に蓋をしたような、そんな感覚だ。

僕は小腹が空いたので、居間に降り、テーブルの上のみかんを食べる。

その時、たまたま、そう、たまたま和室にあるアイロンとアイロン台が目に入った。

親父のシャツだろう。

純白のシャツがアイロン台に放り投げられており、その横にアイロンが立てられている。

僕はそのアイロンに手をとってみる。

スイッチを入れてシャツの上に押し当てる。

アイロンの下のシャツに刻まれた皺が、アイロンを滑らすとまるで魔法にかかったみたいく消えてゆく。

「あんた何やってんの？」

後ろから突如母親に声をかけられ、僕はびっくりしてその場を飛びのいた。

「真一アイロンかけてくれたの？ 珍しいね」

「いや、やりかけだっただろ？ ちょっと気になって」

「ふーん、変なの」

僕は適当に言い繕い、その場を離れた。

どうかしてる。外に出よう。

僕はジャージに着替え、ランニングシューズを履くと外に出た。なんだか無性に走りたくなった。

体を思いっきり動かしたい。

最初は早歩きくらいのペースで走り出す。

徐々にペースを上げていく。

そのうち息が苦しくなり、肺が激しく酸素を求めて喘ぐ。

僕は公園まで走りきる。

公園につく頃には僕はぜいぜいと息を切らし、そのまま砂場に倒れるように寝転んだ。

しばらくは砂場に寝転んだまま、ぜいぜいと息を切らし、空を見上げていた。

空は憎たらしいまでに遠く、青い。

吸い込まれそうなくらい遠い空を見上げていると僕と空との間に、子供の顔が入った。

自分の縄張りで寝転んでいる変な大人を見て不思議に思っているのだろう。

「なにしてるの？」

「なにしてるんだろうな」

僕は息も切れ切れにそう答えた。

「へんなの」

「へんだな」

そうだ、まったくおかしい。

この三日間、家に帰るところなる。

何か、こう、頭の芯から熱くなり、泣きたくなる。

子供はしばらく僕を眺め、僕が砂場からどく事が無いのをわかり、走って立ち去った。

僕は何をしているのだろう。

こんなところで大の字になってたって仕方ないのに。

その時、空からバスケットボールが降ってきた。

それは僕の鼻の上にまっすぐに落ちると、僕の目の中に星を降らせた。

遅れて感じる鈍い痛み。

「……いつてえ」

ジンジンと痛む鼻を押さえてよろよろと立ち上がる。

僕は転がるバスケットボールの持ち主を探し辺りを見回すと、制服を着たみかが立っていた。

学校帰りなんだろう。

みかは地面を転がっているバスケットボールを拾い上げるとため息をつく。

「ナイツシュだ。かなり痛かった」
「そりゃどうも」

みかは僕をみて呆れ果てたような顔をしていた。

「何してんの？」

「アイロンかけてるように見えるかよ」

「見えないわよ」

僕はよろよろと立ち上がる。

丁度いい。

僕はみかに言った。

「みか、丁度いい。つきあえよ」

みかは驚いたように目を見開き、顔を赤らめると少し俯く。

「真一の気持ちは嬉しいけど遙に悪いよ」

「馬鹿野郎。違うって、運動すつからちよつと付き合えよって意味だ」

「……あっそ！」

僕がそう言うときみかはバスケットボールを僕に思いっきり投げつける。

僕はそれをかろうじてキャッチするが、思いっきり手が痺れた。腕に走る痛みに顔を歪めるが、僕はそれを地面に叩きつけ、ドリブルを始める。

そして、公園の端に設けられているバスケットボールのハーフコートにドリブルしながら駆け込むと、僕はゴールに向かってシュートする。

ドリブルシュートだ。

ボールはゴール板の上でバウンドし、ゴールのリングに弾かれて地面に落ちた。

だが、そのボールはすぐにみかに拾われ、弧を描いてリングの中に吸い込まれるように落ちる。

さん、と網を揺らしボールが落ちる。

僕がみかを見やるとみかは得意そうに笑っていた。

「ナイツシューでしょ？」

その顔がとても、眩しく、また、僕を苛立たせた。

僕は鼻の頭を親指でこすると、ボールを拾い上げるとみかに投げた。

みかはそれを胸の前で受け止めると、地面にタムタムと叩きつけ、ドリブルを始める。

そして、挑戦的に僕を見る。

僕にボールを奪えと言っているようだった。

僕はそのままみかに一直線に走る。

みかは僕の前で体を左右に振り、僕が一瞬怯んだその隙に僕の脇を通り抜け、ゴールに走る。

僕が振り向いた時には、みかはゴールに向かってジャンプしていた。

みかの手を離れたボールが綺麗にゴールに収まる。

そして、風の中に舞う羽のように軽やかにコートに降りたみかは憎らしいほどに眩しかった。

みかがコートを転がるボールを僕に投げてよこす。

僕はそれを受け止めると同じようにドリブルを始める。

みかが次の瞬間には僕の前に立っていた。

僕は体を半歩さげ、自分の後ろにボールをかばうようにしてみかの横を抜けようとする。

みかは巧みに体をさばいて僕の前に立ちはだかる。

僕が必死にみかを抜こうとするが、みかはそれを余裕でそれを阻む。

その表情には余裕の笑みがあり、僕はそれが無性に腹立たしかった。

「……つくそ！」

僕はみかを押しのけるようにして抜く。

だが、その時にバランスを崩し地面に倒れそうになる。

僕は地面に倒れこみながら、やけくそ気味にシュートを放つが、ボールはゴール板の上で弾むと、そのままコートの上に落ちた。

僕は地面に転がると、得意げな笑みを浮かべるみかを見上げた。

「真一がバスケで私に勝てるわけないじゃん」

「うるせえ」

僕は立ち上がると、再び、みかに挑んだ。

その後、何度も僕はみかに挑んだがことごとく負けさせられた。どれくらい僕は負け続けただろう。

もう、気がつけばあたりは暗くなっていた。

みかはもういい加減呆れたのだろうか、コートの上で倒れている僕を眺めながらボールを地面にタムタムとついている。

「真一、もう帰ろうよ」

公園の街灯が淡く輝く。

蛾がどこからかやってきて、街灯にたかる。

僕は鉛のように重たい体をひきずるように持ち上げ、立ち上がるとバスケットのゴールに支柱にしがみつく。

靴を脱ぎ、靴下を脱ぐ。

「真一？」

みかが心配そうに僕を見るが、僕は構わずバスケットのゴールの支柱にしがみつくと、それをよじ登り始めた。

「真一！危ないよ」

僕はそれに構わずゴールの上によじ登る。

僕はゴールの頂上まで上りきると、ゴール板の上に腰かけ、リングの上に足を乗せた。

そして、僕はそのまま腰を上げる。

直径2センチにも満たない鉄のリングの上に立ち、軋むゴール板に僕は何か落ち着きを感じている。

「真一！降りなって！壊れたら危ないよ！」

「……そうだな」

僕は地面で心配そうに僕を見上げるみかから目を逸らし、空を見上げた。

今にも壊れそうなゴールの上で空を見上げるとそこには僅かに星が浮かんでいた。

僕はとりあえず、叫んで見た。

「ウオオオオオオオオオオオオオオ！」

みかがびっくりして何かを言っているが僕には聞こえなかった。
僕は何かどうしようもない、憤りを叫ぶ事でしか表す事ができなかった。

「どうしよう……みか」

弦く僕に、みかが心配そうな顔を向ける。

「俺……どうしようもなく、アイロンかけたい」

ふと、こぼれた言葉はどうしようもないまでの僕の本音だった。そう、遠藤真一は、ただ、今、この瞬間において生きている証が欲しかったんだ。



僕は次の日の放課後、嶋本先生のところに足を運んでいた。

どうしようもない思いが胸の中で渦巻いていた。

それを止める術は僕には無かった。

夕日の差し込む誰も居ない教室。

嶋本先生は一人、明日の授業の用意をしていた。

嶋本先生は何かを決意した僕の目を見て、開いていた教科書を閉じた。

先生は僕の方を見て、全てをわかったような、そんな目で優しく聞いてきた。

「遠藤、アイロン……好きか？」

僕は泣きそうになりながらも答えた。

「先生、俺、アイロンかけたいっす……」

差し込む夕日の中、先生は優しく笑っていた。

僕には迷いはもう、なかった。
先生はがっしりと僕の手を握る。
僕はその手を握り返した。



次の日以降、僕の生活は一変した。

「っしやあっ！」

まず、朝早く起きると早朝のランニングに出る。
一時間、大体十キロ前後走ると今度は公園で筋力トレーニングを始める。

腕立てを五十回、腹筋背筋を五十回、そして、インディアンジャンプを四十回、これを三セット繰り返す。

「真一……もう駄目」

トレーニングと一緒にいつてくるみかはいつも途中でギブアップする。

そして、家に戻り体が暖かいうちにプロテインで朝食を採る。
軽くシャワーで汗を流すと、登校する。

僕のトレーニングに付き合うみかは、もうこの時点でふらふらしているが、僕も最初の頃は結構疲れた。

そして、授業中に少し休み、放課後、今度は嶋本先生と特別メニューをこなす。

グラウンドの隅にあったプレハブ小屋を改修し、そこを部室として使用し、先生から色々な講義を受ける。

まだ、正式な部として認可されていないアイロン部には立派な部屋等無い。

「いいか、遠藤、エクストリームアイロンは危険な場所でやるから意味がある。そして、危険になれば危険になるほど死の可能性が高くなる。だが、正しい技術と体力、そして、万全の計画をもってすればその危険はコントロールできる」

それが嶋本先生の口癖だった。

嶋本先生は聞くところによると先生になる前は消防のレスキュー隊員だったらしく、ロープを使ったラペリング技術や、スキューバダイビングの技術に習熟しており、僕は先生といるときはもっぱらロープの結び方や、ダイビング機材の扱い方を学んだ。

先生が居ないときは、みかが持つてくるバスケット部のユニフォームでアイロンがけの練習をしたりもした。

そして、夕方、帰宅するとバイクの免許を取るため、教習所に通った。

親を説得するのは大変だったが、親父と殴りあった結果、僕の真摯さを認めて通うことを許してくれた。

僕がへとへとになって家に帰り着くのは、いつも夜九時を過ぎてからだ。

そのまま泥のように眠り、次の日の朝を向かえ、また、同じ事を繰り返す。

それはとても辛かったが、逆にそれが誇らしかった。

それだけの事をできている自分が、また、着実に体ができていく自分が物凄く充実しているように思えた。

僕が嶋本先生の下でアイロン部として活動するようになって二週間が過ぎた頃、僕はバイクの免許を取得し、先生が昔乗っていたCB400を貸してもらい、エクストリームアイロン部となって初のエクストリームアイロンを実施する事になった。

誰もいない教室で先生が黒板にバイクと車の絵を書いて説明する。

「いいか遠藤、今回のエクストリームアイロンは走る車の上にアイロン台を置き、そこにシャツを固定する。そして、バイクで併走するアイロナーがアイロンをかける。この時、気をつけなければならないのがスピードの調整だ。今回は時速四十キロで固定する。時速四十キロで進行すると秒速約一二メートルになる」

先生が黒板の上に数字を並べる。

僕はその数字を眺めながら答えた。

「となると、この実施予定地にある五百メートルの直線道路ではアイロンをかけれる時間は四一秒しかない」

「そうだ、だが、実際には加速や写真撮影も含めるとアイロンを当てられる時間は二十秒あればいい方だと考えた方がいい」

「しかし、先生、僕がアイロナーを担当するとして車の運転は先生が実施する事になりますよね？そうすると、写真撮影は誰がする事になるんですか？」

「うむ、非常に頼みづらいのだが……」

僕と先生の視線がたまたま廊下を通りすぎたみかに向けられた。僕に教室の中に引きずり込まれ、事情を説明されたみかは驚く。

「えええ！私があ？」

「大丈夫だ。オートフォーカス式のデジタルカメラだ。横の緑色のランプが点滅したらシャッターを落とせばいい」

「でもバスケット部で忙しいし」

なんとか断ろうとするみかに対して僕が食い下がる。

「みか、お前アイロン部のマネージャーだろう？いつも僕がバスケット部のユニフォーム洗濯してアイロンかけてやってるじゃないか」

「もう辞めます！」

叫んで、みかが困ったような顔をする。

「あんたもどうかしてるわよ！何で急にこんな馬鹿な事に夢中になってんの。信じられない。バカじゃん！」

「馬鹿な事なもんか。みかもやってみればアイロンの素晴らしさに気づく」

「ほんっとうに信じられない」

みかは首を左右に振り、必死に断ろうとしたが、僕がしつこく頼み込んだら折れた。

「……ただ、カメラのシャッターを押すだけだからね」

惘然とするみかを放って置き僕は先生と計画を煮詰める。

「……先生、シャツは何色のを用意したらいいですか？」

「一般的には白のシャツが多いが茶色系のカラーシャツの方が実は写真映りはいいんだ。できればカラーシャツの方がいいが、無い場合は白で大丈夫だ」

僕と先生は再び、細部の調整にまつわる話を再開する。

そうして、今現状で万端といえる準備をして、初のエクストリームアイロンに望む事になった。



決行の前の日、僕は和室にあったアイロンを充電にかけるとアイロン台を撫ぜる。

多分、嬉しそうな顔をしていたのだろう。
それを後ろで見ていた母親が首を傾げる。

「真一何やってんの。あんた気持ち悪いよ」

うるさい。構うものか。

僕はその日の夜、興奮してあまり眠れなかった。
遠足に向かう前の日のあの期待に膨らむ胸の高鳴りがアイロン台
を抱えて眠る僕の胸を締め上げる。

殆ど一睡もできないまま、僕は朝を迎える事になった。
だが、しっかりと意識は落ちていたらしい。

「真一、起きてよ！もうすぐ先生との約束の時間だよ！」

いつ、眠ってしまったのだろう。

ふと気がつけばみかがパジャマ姿の僕の襟首を掴んでがくがく
と揺さぶっている。

時計を眺めていると既に十一時を回っている。

冷や水を頭からかけられたように意識が鮮明になり、僕は叫ぶ。

「やっべえ！」

「何やってんの真一！早く着替えて！」

僕はそこにみかが居るのにも関わらず着替え始める。

「ばか！私が出てから服脱いでよ！」

みかは顔を赤らめながら部屋を出る。

僕はそんなことに構わずジーンズを履くと、この間先生から貰った皮ジャンに袖を通した。

溜めていたお年玉をはたいて買ったフルフェイスのバイクのヘルメットを二つ持ち、外で待っていたみかに片方を渡す。

「真一！アイロンは？」

「あ、忘れてた」

「何やってるのよもお！」

苛立たしいみかの声を聞きながら僕はベッドの下に転がっていたアイロン台を掴む。

そして、急いで下に下りるとシャツとアイロンを手に右往左往している母親がアイロン台を抱えている僕をみつける。

「真一、あんたがアイロン台持ってたの？お父さんのシャツにアイロンかけるからアイロン台返しなさい」

僕は親父のシャツとアイロンを母親の手から奪うと

「母さんがアイロン持ってたのかよ！今日使うのに昨日充電しといたんだから返せよ！親父のシャツも俺が使うからいいよ！」

と、はたから聞いていたら訳の分からない日本語を言い残してそのまま家を飛び出した。

「ちよつと真一、待ちなさい」

「ごめんなさいおばさん。説明はまた今度です！」

みかが母親に頭を下げながらもたしているのを急かすと僕は家の横に止めていたCB400のエンジンをかける。

一発で小気味良く吹き上がったエンジンだが、軽くアクセルを開き勢いをつける。

それに、なだらかな登りは多少アクセルワークを間違えても速度を出しすぎる事は無く、速度の調節をするには最適だった。

山道に設けられた休憩所に先生は居た。

約束の場所に着いた時、既に先生は既に準備が完了していた。

真っ黒なスカイラインGT0に頬杖をつきながら僕が来るのを待っていたのだろう。

僕がつくと先生は軽く手をあげる。

僕はそれに対して中指と人差し指を立て、敬礼する。

バイクを車の横に止めると、みかはよろよろとバイクから降りる。

「真一、帰りは安全運転で帰ろう？でないと命がいくつあっても足りないよお」

情けない声をあげ、みかは地面に座り込む。

ヘルメットを脱いだみかに嶋本先生はカメラを渡す。

「使い方はこの間教えたとおりだ。所定のポイントで俺と遠藤が走ってくるのを見て写真を撮ってくれ」

「どんな写真を撮ればいいんですか？」

「アイロンとシャツと遠藤が格好よく撮れてればいい」

えらく端的な説明にみかは不承不承納得しながらよろよろと歩いていく。

みかが遠く歩いていき、手を振った。

撮影ポイントに到着したのだ。

僕と先生はお互いを見合わせると、お互いが頷いた。
先生が号令をかける。

「これより！エクストリームアイロンを実施する！」
「っ了解ッ！」

鋭い気迫でそれに答える。

「アイロン台、シャツ用意！」

先生の号令を受け、僕はアイロン台を先生のスカイラインのルーフの上に固定する。

ご丁寧にスキーキャリアを改造したものが取り付けられており、それがアイロン台をがっしりと固定した。

そして、更にそのキャリアに親父の茶色のカラーワイシャツを挟み、固定する。

「アイロン台、シャツ、準備よしッ！」

「ヘルメット装着！」

「ヘルメット装着っ！よしッ！」

僕がヘルメットを装着すると先生は車に乗り込む。

「エンジン点火あッ！」

先生のGTOのエンジンが唸る。

「エンジン点火あッ！準備よしッ！」

僕のCB400がそれに答えた。

「アイロン、用意ッ！」

「アイロン、準備よしッ！」

僕の手の中でアイロンが静かに僕の手の中で熱を持つ。

ゆらりと熱気がアイロンから滲み出る。

僕は今にもクラッチを繋ぎ、アクセルを解放したい衝動を必死に抑え、喉の奥から迸りそうな何かを堪えていた。

先生が僕に向けて拳を突き出し、親指を立てる。

僕も、親指を立ててにやりと笑った。

先生がサンバイザーからサングラスを手に取り、それを目に被せると不敵に笑う。

「行くぞ遠藤……」

「遠藤真一準備よしっ！」

僕はアクセルを豪快に噴かして言葉無く答える。
そして、先生が咆えた。

「エクストリイム……」

確かにそれは僕の体の中で渦巻き、喉の奥までこみ上げていた。

「アイロオオオン！」

「っイヤアアアアアアアアアアア！」

獣じみた咆哮が僕の喉から迸る。

まずは、先生のGTOが暴力的に加速する。

タイヤがトルクに耐えられず、発進の際、アスファルトを削り白煙を散らす。

タイヤが叫び声をあげながらアスファルトを蹴飛ばすとGTOは風を切って飛び出した。

その後を追う獣のようにCB400が咆える。

エンジンが獣のような唸り声をあげて咆える。

次の瞬間、首根っこから後ろに思い切り引き倒されそうな暴力的

な加速度が僕の体を引っ張る。

僕は必死にハンドルを握り、しっかりと股にタンクを挟み台風のような加速度をねじ伏せる。

先を走るGTOに僕のCB400は間を置かず追いつがった。

僕はブレーキを踏むことなく、体を左右に振り、バイクを右に、左にと揺さぶる。

あわせてタイヤが白煙を上げ、グリッド痕をアスファルトに刻みながら咆え叫び、スラロームを描く。

GTOが所定の速度になった後、僕はバイクをその左横につける。微妙なアクセルワークで一定の速度を保つ。

そして、GTOとCB400があと僅かで触れるところまで接近する。

僕はあの絶壁で感じた恐怖が背中を駆け抜けるのを感じた。

僕が次の瞬間、ハンドル操作を誤りGTOと接触したらまず間違いない僕は無事ではないだろう。

そして、先生だってその責任を負うだろう。

前に見たバイク事故の運転手のように膝の骨が肉を裂いて現れる。そんな恐怖を目の前に感じながら僕は最高の充実感を得ていた。

僕は右手に掴んだアイロンをGTOに伸ばした。

先生はちらりとサイドミラーで僕の様子を確認し、親指を立てた。

僕は口から迸るそれを留める術を知らなかった。

「エクストリイイイイムアイロオオオオオン！」

熱くたぎった鉄の塊をシャツに押し付ける。

それは茶色のシャツの上で迸り、皺を伸ばす。

世の中の全ての不条理を消し去れるような凄まじいエネルギーの奔流を押し込んだアイロンがアイロン台の上で、シャツの上で迸る。

「アイロオン、ツイヤアアアア！」

僕は叫びながら、駆け抜け、ただその瞬間、自分が生きている証を、皺のなくなったシャツと、余熱の残るアイロンに見出していた。



次の日、僕が誰も居ない屋上で弁当箱を開いて遅い昼を食べているとそれはやってきた。

隣のクラスの水下学だ。

水下は屋上のドアを開けて一直線に僕のところに駆け寄ってきた。

「遠藤！お前、凄い事になってるぞ！」

「あん？」

僕は弁当箱の裏についた海苔を箸ではがしながら素っ頓狂な声を上げた。

水下はずっと興奮したまんまだ。

「お前、アイロン部って作るんだって？今、中庭でバスケット部の金井と二ノ宮がビラ配ってるぞ？」

「うっそ！」

僕は全身の血がさっと引いていくのを感じながら立ち上がる。

屋上のフェンスに駆け寄り、中庭を見下ろす。

そこにはグループを作って昼飯を食べている生徒に、片っ端から声をかけながらビラを配っているみかと二ノ宮が居た。

というより、みかが無理矢理二ノ宮を引きずり回しているように見えた。

「あいつ……」

僕は舌打すると中庭に走る。

「アイロン部です！入部希望者募集してますー！」

「入部希望の方は二年A組の遠藤真一までお願いしますー」

みかは通りすぎる生徒にも片っ端から声をかけて回り、ビラを配っている。その後ろで二ノ宮がぺこぺこ頭を下げて回る。

僕は二人に近づく和不機嫌な顔を隠そうともしなかった。

「なにやってんだよ」

「なについて……部員の勧誘してるんじゃない？マネージャーとして当然でしょ？」

「バスケ部の正部員だろうお前は」

「でもアイロン部マネージャーも兼務してるもん。ねえ？遙？」

「はい！」

二ノ宮が嬉しそうに頷く。

僕はこめかみの辺りを押さえ、難しい顔をしながら二人が配っているビラを見る。

そこには一番最初に先生とやった断崖絶壁でアイロンをかけている僕の姿がプリントされており、そこにでっかく「さわやかな青春とシャツをあなたに」とロゴが斜めに入っていた。

そして、その同じくらいの大きさの字で「金井クリーニング」とあった。写真を撮るのを嫌がった昨日と態度が違う原因はこれか。

そう、みかの家はクリーニング屋だった。

「お前、何勝手に人の写真で広告作ってるんだよ」

「商店街のおばちゃんたちには凄い好評だよ。いい男だって」

みかは悪びれる風もなく、笑うとまた、近くを通りすがった男子生徒に声をかける。

「あ、すみませーん！」

僕は頭が痛くなるのを感じながら、これから起こるであろうトラブルを予想した。



「やっぱり……」

僕が放課後、ロープや資材の扱い方を練習する空きのプレハブ小屋に行くと、そこには山積みされた運動部の練習着が置いてあった。倒れてくればそのまま僕を飲み込むのではないかと思う程積み上げられたそれは、北星学園の生徒の青春の汗を吸って、酸っぱく香っていた。

せめて洗濯してからこっちに持って来いと言いたくもあったが、みかが配ったビラが悪い。

これじゃあまるでクリーニング屋じゃないかと僕はうんざりした。僕に遅れて入ってきた嶋本先生も苦笑を浮かべた。

「これじゃクリーニング屋だな。正式に部として認められたらアイロンだけじゃなくて洗濯機も要求しないとな？」

冗談とも本気ともつかない事を言う。

僕はため息をつくとき、山になった洗濯物を眺める。さて、どうしたものか。

僕が思案に暮れていると、そのプレハブ小屋に誰かが入ってきた。

「あの、アイロン部の部室ってここでよかったですか？」

「うん、ああ？二ノ宮じゃないか」

そこには二ノ宮が居た。

いつもみかと一緒に居る二ノ宮が一人で居るのはシチュエーション的には珍しかった。

だが、僕はそれよりアイロンとアイロン台を抱えているのに気がついた。

「二ノ宮、それ？」

「はい！先輩、私、アイロン部に入部します！」

「はあ？二ノ宮はバスケット部だろう？」

「いえ、今日バスケット部は正式に退部してきました！私、アイロン部の正部員になります！」

二ノ宮は口早にそうまくしたてた。

なんだろう、二ノ宮ってこんな子だったわけ？

なんか、こう、もっとおとなしい子だと思っていたが、違ったみたいだ。

「嶋本先生……女子にはちょっと危ないんじゃないですかね……」

「いいんじゃないか？アイロンかけるのに男も女も関係ないだろう。今男女差別とかでうるさいけど絵的には女の子がアイロンをかけている方が絵にはなるからな？」

先生はあくまで楽天的だ。

僕は少々不安になりながらも、認めざるを得なかった。

「遠藤真一ファンクラブ第一号として、アイロン部に入らない訳

にはいかないですから!」

「はあ!？」

今度こそ僕は驚いた。

「知らないんですか?先輩、今年生の間で人気なんですよ?ホラ、毎朝こっそりランニングしてるじゃないですか?あの姿に憧れる人、多いみたいですよ」

確かにこっそりランニングはしているが、それを知っている人が居る事に驚いた。

「ま、私が言いふらしたんですけどね」

言って二ノ宮が笑う。

その直後だ。

部室のドアを開けて水下と、あと一人誰か知らない男子生徒が入ってきた。

「二ノ宮さん、洗濯機ここでいいのかな?」

「あ、伊藤先輩、水下先輩。それ、外に置いておいて下さい」

思い出した。水下と一緒に居る男子生徒は三年A組の伊藤新吉先輩だ。

確か、校内の学力テストで三年生で一番を取った人だ。新聞部で作った校内新聞「北星タイムス」で見たことがある。

小さな眼鏡が、その丁寧な口調とあいまって爽やかな印象を与える人で、うちのクラスの女子にも人気が高かった筈だ。

しかし、水下と一緒に居る事も不思議だった。校則で指摘されている茶髪に、ピアスが伊藤先輩と正反対なベクトルに位置する、典

型的な不良学生だ。確か、軽音楽部の部屋によく入り浸ってた筈なのだが。

「水下、お前どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたも、入部するに決まってるだろう。アイロン部でお前だけ女子にモテモテになるなんて間違ってるじゃないか。何でお前のファンクラブが出来てるんだよ」

どうやら二ノ宮の言うとおり、本当に僕のファンクラブが出来て
いるみたいだ。

一体どのくらいの規模のものか気にはなるが、今はそれどころじ
やなかった。

「それで遙ちゃんに入部したいって言ったらとりあえず伊藤っち
ゃんと一緒に洗濯機運んでくれって言われてよ？」

「どうも」

伊藤先輩は人のよさそうな笑みを浮かべて僕に対して頭を下げた。

「ええっと、伊藤先輩ですよね？」

「あ、今度アイロン部に入部する事になりました。遠藤部長。よ
ろしく願いますね」

校内一の秀才にそう言われて何かむずがゆく感じたが、それより
も、伊藤先輩も入部する気でいるらしいという事がわかった。

昼にビラを配って、その放課後にこれだけの人数が集まった。
部としては好調なのだろうが、みんな、アイロン部が何をすると
ころかわかっているのだろうか？

二ノ宮はこの間、僕が絶壁でアイロンをかけているのを知ってい
るからいいとして、他の二人は分からない。

「えっと、水下も伊藤先輩もアイロン部って何するところかわかってる？」

「あれだろ？クリーニング屋の真似事だろ？男の中にある母性。それが運動部の女子にウケるんだろう？」

と、水下。

「アイロンの歴史か何かを勉強する部活ですか？」

とは伊藤先輩。

僕は一応、二人に対しアイロン部がするのはクリーニング屋の真似事ではなく、また、アイロンの歴史を調べたりするものでもない事を告げ、そして、エクストリームアイロンについて簡単に説明した。

「はあ！そんなの聞いてねえよ！ばっかじゃねえの！」

「それは危ないですねえ」

水下と伊藤先輩は思ったとおりの驚きを顔に浮かべる。

水下あたりはもう帰り仕度をしている。

「そんなアブねえアイロンがけやるなんて遠藤お前馬鹿じゃねえの？俺は抜ける」

「水下君はやめるんですか？」

伊藤先輩は残念そうに水下を見る。説明を聞いても伊藤先輩は残る気ではない。

「女の子にモテると思って入ろうと思ったのに説明を聞いたらた

だの馬鹿じゃねえかよ、やってられっか」

水下はそう残してプレハブを出て行こうとした。
その時だ。

「真一！遙こっちに来ていない？」

みかが勢い良く部室に走り込んできて、部室を出ようとした水下
と思いつきりぶつかった。

「……ったあ」

額をぶつけて水下は仰向けに倒される。

骨と骨のぶつかりあう、がつんという大きな音が鳴っていた。

みかは額を押さえながら涙目になりながら、僕を睨む。

「真一！遙に何を吹き込んだの！今日部活に出てみたら遙が退
部してアイロン部に入ってたって言ってたよ！」

「僕もびっくりしてるよ」

当の本人である二ノ宮は僕の後ろに隠れるようにして、みかを見
る。

「あの、金井先輩怒ってます？」

「なんで私になんの相談も無いのよ！」

どうやらみかは怒っているようだ。

そりゃそうだろう、いつも一緒に居たのだ。落ち着いていなけ
れば、裏切られた感覚もあるだろう。

「……でも、決めたんです」

二ノ宮はいつもの二ノ宮らしくおとなしく控えめな、しかし、それでもはつきりとそう言った。

みかは何かを二ノ宮に言おうと口を開く。

二ノ宮は肩をすくめ、その形相に怯えるが、しっかりとみかを見つめていた。

この二人の間に何かがあるのかはあんまりよくわからないが、みかはそこで何かを二ノ宮に感じたようだ。

「……わかったわ。納得はいかないけど納得するわよ。ただし、私もマネージャー兼務してるんだから遙に何かあったら、真一！ あんた責任取ってもらうからね！」

みかは僕を睨んでくる。僕は釈然としないものを感じながらも、とりあえずはのろのろと起き上がる水下に手を貸した。

「水下、大丈夫か？」

「……ってえ……金井がマネージャーって本当かよ？」

「ああ、とりあえずはバスケット部と兼務らしいけど……」

水下は複雑な顔をする。

「金井って……二年女子ランキング二位の？俺、もうちょっとアイロンのメンバに居てみよう」

そんなランキングがあるのは初耳だった。

僕は一抹の不安を感じながら、この面子を見渡す。

昼の騒動からほんの僅かで集まったこのメンバーが当面のアイロンのメンバーなのだろう。

僕が嶋本先生を見ると、先生はテーブルの上に座ったまま満足そうな笑みを向けてきた。

「頑張れよ。部長」

「嶋本先生……」

いつの間にかアイロン部は形となっており、僕はその部長の座にすっぽりと収まってしまっていた。

「じゃあ、部長、今日はまず、どうしますか？」

二ノ宮が僕に対し何をするかたずねてきた。

水下や伊藤先輩、みかが僕が何を言うのか待っていた。

僕は咳払いすると、とりあえず部室の隅に押しやった洗濯物を指差した。

「とりあえず、コレ、なんとかしよう。でないと臭くてどうしようもない」

青春の汗を吸った、洗濯物の山は酸っぱく黄色い匂いを徐々に部屋の中に広げていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7740y/>

アイロンより熱く、シャツより爽やかに

2011年11月23日02時26分発行